

「名医」とはどんな医師か

旧友の男女2人と一杯やったときのこと。
「いやあ、久しぶりによい医師に診てもらった。名医だったな」と男のほうが好きそうに言った。

「ゴッドハンド？」と女史が尋ねた。

「いや、ただの風邪だったから、ゴッドハンドかどうかはわからない」

「どこが名医だったの？」

「診察室に入ったら『お待たせしました、山本さん』て笑顔で挨拶をしたんだ」

「挨拶？ それから？」

「『私は高橋といいます』って名乗った。いい感じだったな、あれは」

「もしかしてセクシーな女医だった？」と女史がからかった。

「男だよ男。ほくが症状を説明したら、ちゃんとうなずきながら聞いてくれた」

「それだけ？」

「説明したら、『それはつらかったでしょうね。じつは私も先月、同じような症状になりました。しんどかったな』って。一緒に笑っちゃったよ」

「ふうん。それで、どこが名医なわけ？」

「診察室を出るとき、とても気持ちがよかったんだよ。ああ、こんな医師がいるなら、またこようかと思った」

「あなた、小児科にでも行ったの？」

女史は肩をすくめて笑った。

なるほど。おもしろい話だと思った。

「名医」という言葉の捉え方が全く異なっていたのだ。

試しにその場で「名医」を調べてみた。グーグルのトップには「すぐれた医者」とある。これではわからない。

人事コンサルタント 本田 有明

術と人柄を併せ持つこと

私はその日、出版社で著者校正をした帰りだったので、『新明解国語辞典』という辞書を持っていた。「名医」を引いてみる。

「医術と人柄のすぐれた（ことで評判の有る）医師」。これは的確な説明だと感心した。

男のほうは「人柄のすぐれた医師」として語り、女史のほうは「医術」いわゆるゴッドハンドの持ち主と解釈したため、かみ合わない会話になったわけだ。

一般に「名医」というと、最近は医術＝ゴッドハンドの持ち主と解釈する傾向がある。しかし古くから「医は仁術」というとおり、すぐれた人柄のほうも名医の重要な条件であることは間違いない。

男が「名医」だと感じた点をまとめると、

- ①患者の名前を呼んで挨拶をした。
- ②きちんと自分の名前を伝えた。
- ③患者の話をうなずきながら聞いた。
- ④患者の症状に共感を示した。

どれも何げないことのようにだが、彼が「またこようかと思った」のはよくわかる。これらをすべて欠いて、患者に不快な思いをさせる医師が、最近増えているからだ。

考えてみると、上に挙げた点は医師に限らず、よき管理者の条件とも重なる。③は術語ふうにいえば「積極的傾聴」であり、④は「共感的理解」である。どちらも部下や後輩と信頼関係を築くうえで欠かせない要素だ。そのうえで医術ならぬ管理術をしっかり修得することができれば、名管理者といえるだろう。

「いい話を聞いた。今度、講演のエピソードに使わせてもらおうかな」と私が言うと、「だったら今日のご馳走になるぞ」

……急に感じの悪い患者に見えてきた。